リズムあそび

村井　ト　ミ

幼稚園におけるのぞましき活動の中から、今回はリズムあそびを拾って記してみよう。一口にリズムあそびというが、よく考えてみるとこの言葉からして実にむずかしい。どこまでの範囲をさしているのか？　体を動かして表現することも、歌をうたうことも、楽器を奏することも、鑑賞することも皆含まれているように思える。そこでここでは、その中の体を動かしてする――動きのリズム――の面について具体的な例を拾って考えてみたいと思う。

○自由に思ったままを……

子どもは幼い頃からよい音楽をきくと、自然に手や足を動かしたくなるのが本能だといわれている。とすると、成長するにつれて更にひとりひとりの子どもが自然の形で、思ったままを素直にのびのびと表現させたいものである。私のねらいもそこにあった。

だから入園以来、先生の側からでき上がっている動作をはじめから教えたり、示したりして皆がそのとおりにするようなことはほとんどない。たとえ変な表現でもその子どもなりに自分で手足や体を動かして一生けんめいしているのなら、それでよいと思った。（もちろん、手本ということでなく、先生も共にまじって楽しそうに一しょにすることはある）しかし、ただやらせっぱなしではないのである。そこでそれぞれの子どもの持つ芽をちょっとでものびるように、先生は助言をしなければならない。幼ければ幼い程、ピアノを弾きながらも先生の口は絶えまなく動いているようなものである。その言葉にさそわれて、いままでしょんぼりと小さく咲いていた花も、もっともっと喜々として風にゆれることもできる。とんできた蝶も、もっと軽やかにやわらかいはねを動かして蜜を吸うことにもなる。そうなるとやっている本人自身が本当にその中に没入してくる。先生の発する一言一言がいかに大切かということを（ここだけではないが）つくづく感じさせられる。また、ここで注意しなければならないことは、曲や歌に無関係に自由に表現するようになりやすいこと、この点に先生の指導が必要となるのである。

○はいりにくい子のために……

入園してくる子どもをみると、十人十色である。リズムあそびにも、よろこんで参加する子どもばかりではない。こんな子どもを無

理に手をとって引っぱっても、だめなことはみえすいている。あせらず気長にいれることであろう。その間先生は日常のあそびをよく観察して、その子どもの好きな玩具とかあそびとかをつかんでおくことである。汽車をつなげてばかりあそんでいる子もあるだろう。お人形ばかりだいている子もあるだろうし、何かすきなものをみきわめてリズムあそびの時のテーマにいれると案外抵抗なしにはいっていく場合が多い。私の経験した範囲にもこんなのがあった。部屋の中でいつも汽車をつなげて遊んでいる子どもであったが、リズムあそびに汽車をとりあげると、こちらの誘いにのってその部分だけはいってくる。あとはぬけてまた椅子に腰かけている。しかしこうなればもうこちらのものである。汽車あそびの前後に、いろいろ関係ある曲をくっつけておくと次第に参加する範囲が広くなり自然の形ではいっていく。

すきなあそびをリズムあそびのテーマにとりあげる（導入）

また、簡単なお面をつくってかぶることなどのことが、きっかけとなってすっとはいった例もある。

また、今はリズムの時間と改まらずに、保育室の一隅や、ままごとあそびの一部に、庭での蝶々ごっこなど……かえってこういうところからチャンスをみつけて導入していくことが効果的の場合が多い。うっかりしていると何も気づかずにすんでしまうが、よく気をつけているとチャンスはたくさんころがっているようである。今の時代だから子どもの好きなロケットや鉄人や怪獣で

きれいな花のおめんをつけただけでもうれしくて……

すら上手に扱えば皆と共に参加するうれしいきっかけにならないとはいえない。だからリズムの時間に限らず日頃のあそびから――二、三人から発展して五、六人に――十数人にとなっていくことがよくあるし、私はこれを尊び、大切に育てようと心掛けている。

また、中には男の子などではいりたいのに、てれくさいためというのもある。こういうのはあまり問題はない。先生の方から手をさしのべてあげればすぐにつかまってくる。

○たのしい計画を……

――生活経験を生かして――

――子どもの発言を生かして――

ガソリンスタンド「はいじどうしゃくん たくさんガソリンたべて下さい」

そのためには先生の側にもどうやって子どもたちを楽しませようということを考えておかなければならないし、それぞれにふさわしい感じの曲や歌を用意しておく必要がある。同じ曲でも子どもたちがよく動けるようにこちらも勉強しておくことも大切であろう。

例えば「たんぽぽ」を例にとってみよう。ただ「たんぽぽ」の既成のものを教えて皆で同じようにするだけでは、子ども自身で考え出す力も思うままを動きにあらわすチャンスも失せてしまう。そこで、そこを春の野原にみたてるとする。

〝いろいろの花が咲いています。今日は、たんぽぽさんも芽を出しました〟

〝ほら、芽も伸びてきましたよ。ぐんぐんと葉っぱも出てきました〟

〝かわいいつぼみがふくらんできましたよ〟

〝とうとうきれいなまっきいろなお花が咲きだしました〟

〝やさしい静かな風が吹いてきました。たんぽぽさん、いい気持ちでしょうね、ゆれていますよ〟

〝おや、たんぽぽさん、とうとうおどりだしました〟

〝咲いている中に頭のあたりがモカモカしてきました。白いわたげね〟

〝風が吹いてきて、わたげがふわりふわりととんでいきました。どこへ行くのかしら？〟

〝お山へとんでいったり、畠の中やお屋根の上や幼稚園のお庭にも

とんでいったかもしれないわね〟

〝どうとうふんわりと落ちました。どんなかっこうで落ちたかしら？　横になったり足が上がったままだったりいろいろね〟

などと、音楽と共に言葉を流してあげると、子どもはすっかり「たんぽぽ」になったつもりでやってくれる。

わたげになるところなど、子どもたちは、自分の頭の上を手でモヤモヤさせたり、なでたりして、こちらで見ていてもいかにもおもしろい。最後にすきな場所にそれぞれの形で落ちたところなど最高にたのしいらしい。

これは助言だけでなく実際に得た生活経験が大いにプラスになる。たんぽぽのわたげなどはいくらも皆でみる機会もあると思うので、そうしたあとに取り上げると実感をともなって、表現も、指導もやりやすいわけである。幼稚園では教育内容が、一応六領域に分かれているがどれも互いに相重なりあうことが常である。「たんぽぽ」にしてもいろいろと話し合う場をもつことも必要となってくる。いつかみんなでみたたんぽぽ、○○がどこかで、こんなになっていたと発言するだろうし、動きの途中でも子どもの発言は大いにとりあげて生かすことが大事である。

ただここで注意しなければならないのは、いくら子どものすきなように考えさせるからといって、先生は何も考えない――というのではいけない。一応子どもの発達を考えて研究した上での原案はもっていなければならない。そして先ず子どもに自由にさせてみて、必要ならばその原案を出すこともある。また、先生の原案よりも、子どもの方が、もっといかにも子どもらしいものを投げ出してくれて、なるほどと思わせられることもある。子どもは大人の常識的な考えをやぶってくれることもしばしばあり、大人は大きな目をみはってこれをみつめなければならない。

この一年（五歳児）子どもたちと遊んだものの中から、いくつかの例を拾ってのせておく。

(1)**花が咲く**　種子をまく―芽が出て―葉が出て―花が咲いてゆれる―花のダンス―蝶がとんできて蜜を吸う―みつ蜂がとんでくる―みんなでいっしょにたのしく踊る。

(2)**えんそく**　おべん当をつくる―電車にのる―はらっぱにつく―草つみ―ブランコやシーソーであそぶ―おべん当を食べる―小鳥やりすや兎の小舎をみる。

(3)**幼稚園ごっこ**　幼稚園にくる―砂あそび―ブランコ―すべりだい―ままごと―汽車あそび―なわとび―まりつき―鬼ごっこ―おゆうぎ―おべん当―などなど。（先生や生徒に分かれたりして、○○するものこの指とまれ、などをつなぎにするのもおもしろい）

(4)**雨ふり**　小さい雨―長靴はいて傘さして水たまりをとぶ―大きい雨（夕立）―にげて木の下にかくれる―雨だれ―葉っぱが雨にぬれて光る―小鳥や虫がいそいで逃げる―蛙やかたつむりがよろこんで出てくる。

(5)**海でのあそび**　海で泳ぐ―とびこみ―舟にのって沖へ出る―魚を

つる（いろいろの魚になってつられる）—貝を拾う—波が押しよせる—にげる—長い列をつくってボートレースをする（しんぱん、応援なども）

(6)**しゃぼん玉**　そうっとしゃぼん玉をふく—しゃぼん玉がだんだんとふくらむ—ふわふわとんでいく—とびながらいろいろのものをみる—次々と見たものを表現する。

(7)**動物園**　すきな動物になる（グループがいくつもできる）—見物人がくる—柵の中の動物はおどってみせる。

(8)**ゆうえん地**　飛行機—メリーゴーランド—豆汽車—コーヒーカップ—ジェットコースターなど次々と切符を買っては乗ってあそぶ。

(9)**木の実と落葉**　木になった子どもに落葉や木の実になった子どもがくっつく—風が吹いてまわる—木の葉もはげしくゆれる—木の実はころがり、葉はひらひらと空を舞ってちる。

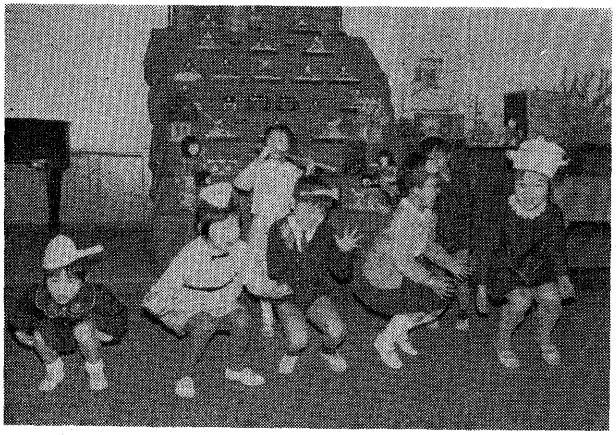
(10)**おもちゃ箱**　夜中におもちゃ箱がにぎやかになる—すきなおもちゃになって踊る—朝になって、おもちゃ箱に帰ってしんとしている。

(11)**サンタクロースごっこ**　雪の子、サンタクロース、そり、子ども、ツリー、プレゼントのおもちゃなどになる。子どもたちがツリーのかざりつけをする—ねむる—雪が降って、おじいさんがそりにのってくる—そうっとねむっている子をのぞいて、いい子にプレゼントを置いていく。（袋の口をあける度に、おもちゃになった子どもが走り出て、しゃがむ）—朝になって子どもたちが目をさます—おもちゃに踊ってもらう—子どももいっしょに踊る。

(12)**お正月のあそび**　はねつき、まりつき、凧あげ、カルタとりなど、自分がまりになってつかれたり、凧になってあげられたりする。

(13)**雪だるまつくり**　雪が降る—雪をころがしてつくる—雪だるまに目鼻をつける—お日様が出てくる—次第にとけはじめる—とけて水になる。

ふしぎな笛につられておなべやフォークまでおどりだしました



(14)**ふしぎな笛**　笛吹きの子がたのしそうに吹く—いろいろの動物がつられて出てきて、それぞれに笛に合わせて浮かれて踊る。（または台所のお鍋やスプーン、フォークまで）

(15)**春がくる**　ねむっていた草

や木や動物が目をさます—春のやさしい風が吹く—ポカポカと暖かい太陽があたる—よろこんで「春がきた」で皆で踊る。

○基礎の動作も……

こうやってすきなように表現したりあそんだりしている間に、一番根本となっている、歩く、走る、とぶ、の三つを音楽に合わせてあそばせる。ただ歩く練習というのもつまらないであろうから、どこかへ出かけることにでもして(歩く)、少し急ぐことになれば(走る)ことにもなる。山に来たので登れば(おそ足)にもなるし、水たまりをとべば(両足とび)にもなる。広い野原にきたのでよろこんでとべば(スキップ)にもなるというようにちょっと意味づけてあげればよろこんでしてくれる。また歩くにしても前に歩いたり、後に歩いたり、横に歩いたり、とまったり、ある部分で一まわりしたり、音の変化や強弱なども加えてすると興味をもってさせることができると思うので、表現あそびと共に平行していきたいことである。

○表現のくふうを……

ひとりひとりの表現が充分にできるようになり年長組ともなれば、友だちと二人(または三人)で相談して何か一つのまとまったものを考えてさせる。曲をひいてその間に考えさせる。グループによってそれぞれいろいろのものができる。そして互いに表現をみせあう。自分たちの考えたものをよろこんで見せ、また友だちのを見ることをもよろこぶ。そしていいしげきとなる。

ここに子どもたちから生まれたものの中から、五つ六つの例をあげてみると

- 一人が花になって咲き、他の一人がジョウロで水をやっている。
- 一人が臼になって、他の一人が杵でつく。
- 一人がまりになり他の一人がつく。
- 一人がピアノになり、他の一人が弾く。
- 二人で一つの時計となり、その中の一人が針になって動く。
- 二人で一羽のくじゃくになる。(一人が体で一人が尾の大きいはねになる)
- 二人で、一匹のキリンや馬になる。
- 二人で向かい合って羽根をつき、中央の一人が羽根になって右へ左へととばされる(三人で)

などなど書きあげればきりがない。

そして今度はどうしようか？　と表現を考えることをたのしみにする。更に発展すれば数人—十人位でも、一つの曲をきいて相談して一しょにおどることもできる。こうなるのは五歳児も終わりのことであるし、皆はりきって楽しさも絶頂というところであろうか。

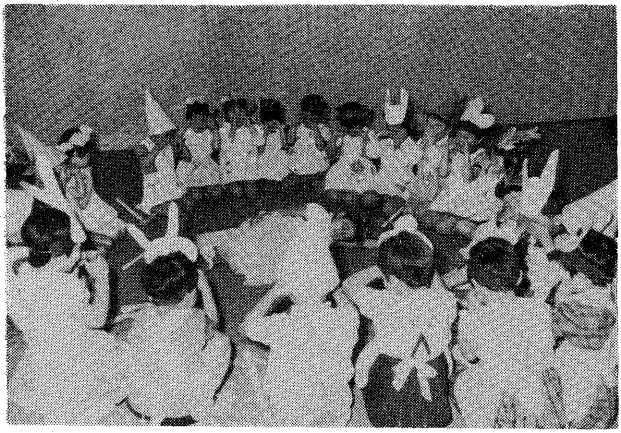
○リズム劇あそび

劇あそびもいろいろあって、言葉を中心として音楽が加わったも

のと、言葉は使わずに音楽だけで動くもの、また、音楽だけで動き、説明は動きにかぶせて他の者がするなどいろいろの方法があるが、ここでは前述の関係上音楽だけで表現するリズム劇をとりあげてみる。日頃の表現活動が活発ならばリズム劇もストーリーが少し大きくまとまったようなものといえる。それぞれの話の筋を追って一応全員でひととおりしてあそぶ。(全員がお姫さまになったり、全員で兎になったり)あとで希望のものを選ぶ。はじめは一人のはずの王子が五人いても十人いてもかまわずに満足するだけ遊ばせる。

そしてそれぞれの持ち場の表現は各自に充分にさせる。先生の流す言葉や、友だちの発言などによって、しのび足は、更に実感がこもり、びっくりした表現も、よろこびの表現も大きくなることであろう。最後に希望の者が多い役はジャンケンでもして決め、それぞれ役を得て、自分のおめんや小道具をつくる。なるべくまわりにあるその辺のものを利用して、大げさな衣装や道具にしないで感じを出すことを、先生も子どもと共にくふうしなければならない。子どもはせっかちである。早くつくってすぐにも使いたがる。こったものより、あっさりと子どもの力でできる程度のものをつくらせたい。先生も大いにアイデアマンでなければならない。

たくさんの費用をかけて、クリスマスとか、ひなまつりなどの行事のために(すなわち人にみせるため)でなく、日頃から手軽に劇あそびをして子どもたちをたのしませたいものである。

男の子がねているあいだに，ぬき足，さし足，金のがちょうをとりにきました

白雪姫がしんじゃった，こびともどうぶつたちもなきました，エーンエーン